

# 亡き父が見た惨状

## 広島原爆の日

### 松山の八原さんの献花し継承誓う

全てを破壊し多くの命を奪った「原爆の日」から71年を迎えた6日、広島市の平和記念公園で開かれた平和記念式典に、愛媛県遺族代表の自営業八原勇人さん(40)＝松山市梅津寺町＝が出席。「地獄」と化したヒロシマを目の当たりにした亡き父の思いを胸に犠牲者の冥福を祈った。(3面参照)



原爆死没者慰霊碑の前で手を合わせ、犠牲者の冥福を祈る八原勇人さん(中央)＝6日午前9時5分ごろ、広島市

「父親が口を開いたのは晩年になってからだった」。3月に90歳で亡くなった八原さんの父・浩さんは原爆が投下された翌日、広島市に入り被爆。「幽鬼か地獄の世界」(手記)を目にしたが、その惨状は晩年になるまで子どもたちに詳しく語らなかった。

松山市出身の浩さんは18歳で広島高等工業学校(現広島大工学部)に進学。19歳のとき、学徒動員として広島市の海軍で働いていた。1945年8月6日、出張任務のため広島駅発の汽車に乗車。駅から約15分離れた地点で「午前8時15分」を迎えたが、汽車は何事もなく走り続けた。

尾道市での任務を終えて帰路に就こうとするも汽車が動いておらず、翌7日に乗車したが途中で停車。線路に飛び降り、目に飛び込んできた光景こそ「くすぶる煙に包まれた広漠たる廃虚」(手記)だった。

炎天下、広島市中心部に向かって歩を進めると、皮膚が垂れ下がり、声にならない声を上げて歩く人たちの姿があったという。「民家は全て焼けて、電車通りの電柱も全部が倒れていた」。浩さんの学友で毎年式典に参列している橋本勇三さん(90)＝広島市＝は71年前を回顧。同級生は相次いで鬼籍に入り「当時を語る人は少なくなっている」と風化を憂う。

そして「原爆が悪いんじゃない。戦争が悪い。勝つためには何でもやるという風潮があったから原爆が落とされた」と語った。

6日の平和記念公園は、額の汗がしたり落ちる蒸し暑さの中、多数の参列者が献花。八原さんも花を供え、平和を願う亡き父の思いを次世代に継承できるように静かに誓った。

「無念のうちに亡くなった多くの命を引き換えに、今の平和がある。戦争体験者が少なくなる中、原爆の恐ろしさを語り継いでいくのは遺族の務めです」(伊藤愛)